「今図書館に求められているものは？」 をテーマに，県内の国・公・私立大学や県立図書館などの図書館職員のための講演会を開催

平成１７年度青森県高等教育機関図書館協議会研修会が弘前大学附属図書館の当番館として，平成１７年１２月１６日（金）弘前大学創立５０周年記念会館会議室において，開催されました。

研修会は，関係機関および学内から約３０名の参加の下，テーマを「いま図書館に求められているもの」と題し，名古屋女子大学常任理事・総務部長雨森弘行氏を講師に迎え，氏のこれまでの大学図書館，公共図書館における永年の経験に基づいて，いま館種を超えて図書館に求められているものはなにかということについて基調講演がおこなわれ，その後，講演についての質疑・応答を中心に講師を交えて参加者による意見交換等がおこなわれました。また，研修会終了後には希望者を対象に弘前大学附属図書館の見学を実施しました。

講師雨森弘行氏は，基調講演「図書館の不易流行ーいま図書館に求められているものー」のなかで，図書館は本を利用するすべての人々にとっての，“成長する有機体的組織体”であらねばならないとし，そのためには，図書館は常に世の中の「変化」や「要請」に対応して成長していくことが必要であり，また，それと同時に，「変化しない基本」の部分も常に意識しなければならない。そして，そのことは，あたかも古の俳聖芭蕉の唱えた「不易流行」の理念にも準えることができるのでないかとしている。そのことを踏まえ，時代の変化に対応する図書館の変化，学術情報基盤としての大学図書館の強化・充実，職員の意識に係る課題や，館種・県域を超えた図書館ネットワークの形成による地域社会への貢献についての具体的な事例にも触れ，今後の新たな知のオアシスとしての図書館の実現に向けて，図書館職員のＩＴスキル・企画力の向上と，図書館が「誰の」，「何のために」あるのかを考え，原点に立ち返ることが重要であるとの指摘があり，参加者は氏のこれまでの豊富な経験に基づいた内容に対し，熱心に耳を傾けていました。

また，基調講演後の講師を交えての意見交換の場においては，参加者から学生の図書館利用教育の現状，図書館利用に係る教員の役割，利用者サービスの拡充のための新たなミッション・ビジョンの策定，その他各館における課題等について意見があり，熱心な討議がおこなわれました。

中弘南黒地区の公私立高校，16 校の図書館担当者が図書館の施設見学に訪れた，その印象は？

青森県中弘南黒地区の公私立高校１６校の図書館担当者が年１回開催している研修会の一環として，６月１５日の午後，弘前大学附属図書館を訪れ施設見学がおこなわれた。施設見学後には，附属図書館研修室において図書館長，学術情報課長及び情報サービスグループ係長を交え，参加者との懇談会も行われました。

そのなかで，各高校図書館・室の利用状況としては，時期，利用目的により利用者数に違いがあり，試験勉強などの座席利用や通学バス・電車の時間までの一時利用の多い高校では１日１００名以上の利用者のいる高校もあるが，５０～２０名位の高校がほとんどであり，１０名以下の高校もあること。課題は生徒にいかに本を読ませるか，読書に興味を持たせるかとしており，生徒と直接書店に行き図書を選定している高校もあること。図書館・室の電算化は担当する図書委員の電算能力によるが，目録入力等の負担が大きいため個々の高校により状況は異なっていること。高校間の連携までは進んではいないこと等のお話がありました。現在，学校教育において言語力を養うため，司書教諭の配置，学校図書館の図書館資料の充実の必要性が言われているなかで，各高校においても様々な工夫をしながら読書教育，図書館利用教育が行われている状況が感じられました。

また，施設見学の感想としては，「図書館を多くの学生が利用している状況に驚いた。」，「食事が出来るスペースが有れば便利である。」，「ゆとりのあるブラウジングルームが必要ではないか。」，「館内の雰囲気が暗い，観葉植物を置いてはどうか。」，「話題本コーナーの設置をしてはどうか。」，「入口からカウンターの位置が遠い。」，「バリアフリーに対応した施設改修を希望したい。」，「入口付近に身障者用エレベーターがあれば便利である。」等の意見の他に，一般利用者の読書相談は受けてもらえるのか，法人化のメリット・デメリットに関して，また，盗難・紛失対策について等の質問がありました。

附属図書館においては，この度の感想・意見等を踏まえ，施設・設備等について改修・増築を念頭に置きながら，利用環境の改善，スペースの有効活用を図れるように検討していくこととしています。